The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	退職のごあいさつ
Author(s)	貴志, 雅之
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 11-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99453
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

退職のごあいさつ

貴志　雅之

時が経つのは早い。これまで何度この言葉を口にしたことか。しかし、定年退職を前にして、これほど自然に過ぎゆく時の早さを感じたことはなかった。1999年に大阪外大に着任してから、2007年の大阪大学との統合を経て現在に至るまで、外大、阪大で過ごした日々は、わたしにとってかけがえのない幸せな時だった。この年月の何気ない一瞬一瞬が、なんの脈絡もなく、アトランダムにフラッシュバックしてくることがある。

1998年、わたしの前任者であった田川弘雄先生の言わばピンチヒッターとして、1年間非常勤で田川先生のゼミを教えた。その当初、まさか翌年、自分が田川先生の後任として外大でアメリカ演劇ゼミを引き継ぐとは思ってもみなかった。そして、今、最初に教えたゼミ生の一人だった岡本太助君が、今後の日本のアメリカ演劇研究を牽引する研究者に成長し、2021年4月よりわたしの後を引き継いでくれる。3世代にわたるアメリカ演劇ゼミの新しい時代の始まりに、幸運なめぐり合わせと時の流れを感じる。

外大に専任として着任する前、内田憲男先生の新築のお宅に招待されたことを覚えている。そこで初めて、後に同僚となる英語専攻の何人かの先生方と顔を合わせた。内田先生と渡邉克昭先生は学会での付き合いもあってよく存じ上げていたが、他の方々は初対面。それでも、みなさん気さくで、すぐに打ち解けた。内田先生は、音楽を聞くための特別な部屋にわたしたちを招き入れ、そこでの話（何を話したかは覚えていない）もはずんだが、なかでも田尻雅士先生は印象的だった。貫禄もあって落ち着いた物腰の田尻さんを、てっきり年上だと思っていたが、後からわたしよりかなり年下だとわかって苦笑したのを覚えている。

田川先生、内田先生、田尻先生が故人となられた今も、先生方と楽しく語らった頃からあまり時間が経っていない錯覚に囚われる。大切な人々との思い出は時の止まった世界で色褪せぬまま息づいているのかもしれない。

他の専攻のことはわからない。しかし、英語専攻は居心地がよかった。教員同士も結構仲がよく、気の置けない仲間が多かった。大学の統合もあって、英語専攻はスタッフ数が減っていく一方、仕事は徐々に増えていった。そんななかでも、互いの協力と理解で、専攻のさまざまな役割と運営は、スムーズに運んできたように思う。わたし自身、英語専攻の一員として仕事をすることが気に入っていた。

英語専攻の授業では、優秀で高いモチベーションを持った学生たちが多くいた。打てば響く、そんなレスポンスをする学生が普通にいる。批判的精神を持ちながら、いい意味で素直で、アドバイスを聞く耳を持つ学生たちがいる。ゼミ生の TOEIC の平均が 900 以上で、満点をとる学生もいる。こういう学生たちが普通にいる大学はあまりない。なのに、こちらは、学生のハイレベルなスコアに慣れてしまって、最近の TOEIC は簡単になったのかな？とつい同僚と話してしまう。こういう感覚を持ってしまうこと自体、学生のレベルの高さとそんな学生たちを相手に授業をしている教員の幸せを物語っていると思えてしまう。

外部検定試験の成績だけではない。英語力は、専門分野を勉強・研究する基礎体力で、要はその英語力で何を学び、何を研究して発信できるのか、どんな議論ができるのか、とわたし自身よく思うし、学生たちにもそのように話してきた。幸運なことに、英語専攻の学生、ゼミ生、さらには大学院生を教えるなかで、こちらの研究にプラスのフィードバックが返ってくることが多くあった。自分一人で研究しているなら思いもつかないことを、授業で学生に話している間に思いついたり、口にしたりする。授業から研究のインスピレーションが浮かんだり、漠然としていたアイディアがまとまった形になってくることがある。こうしたことの積み重ねで、どれほど多くの恩恵を授業から、教えている学生たちから、もらってきたことか。教えることで、こ

ちらが成長する。口では言えても、なかなか実感することは少ない。しかし、こうした経験を積んでゆくことで、研究者としても少しは成長できてきた。学生たちに感謝である。

同僚への思いも同じである。特に、渡邉さんとは、かつて日本アメリカ文学会本部事務局をともに担当し、常日頃から、学生のこと、学会のこと、研究のこと、何かにつけ気軽に話ができてきた。昨年来の新型コロナ感染症の感染拡大でできなくなったが、それまでは毎週水曜の夜、箕面で（だいたい焼き鳥をあてにビールを飲みながら）ミーティング。それが研究・授業にどれほどプラスになってきたことか。毎週、飲みながらの同僚との会合、と他大学の人に話すと、羨ましいとの反応がよく返ってくる。そうです、羨ましい、ラッキーな環境で仕事をさせてもらっています、といつも心のなかで思う。そのお陰もあって、阪大最後の2020年、拙著『アメリカ演劇、劇作家たちのポリティクス——他者との遭遇とその行方』（金星堂）を出した。本書の「あとがき」の一部を引用して、「退職のごあいさつ」の結びとしたい。

いつの頃からか、年に一度、授業で同じ話をするようになった。次のような話である。

みなさんは、生きていくなかで本当に魅力的だと思える人に出会います。人によって、その回数は異なります。二回、三回の人もいれば、六回、七回、あるいはもっと多くの機会を得る人もいるでしょう。見た目のよさや、能力の高さ、性格のよさ、そのほかいろいろ魅力的と呼べるものはあります。ここで言う魅力的な人とは、その人の話を聞いているだけで、自分まで何かをしてみよう、してみたいと思えるようになる。その人の話を聞いていると、何か幸福感に似た感情とともに、胸が高なり、心が動き、自分でも知らない、意識したことのない力が湧き出るような思いがする。自分の道を探して、歩き出したい衝動にかられる。人にそのような思いをさせる、言わば光り輝くような人です。その人は相手にそう思って

もらおうとはしていませんし、そんな意識もありません。ただ、その人の話を聞いてる人がかってにそう思ってしまう。そんな魅力を持った人です。

往々にして、こうした魅力を持つ人には一つの共通点があります。それは仕事であれ、趣味であれ、何らかの活動でも、自分が本気で好きで、真剣に取り組んでいるものを持っている人、心から何かに打ち込んでいる人であるように思います。そういう人は、人真似ではない、その人にしかない魅力が自然と現れてきます。そのような人を見て、その人の言葉に触れて、わたしたちは自分まで何かをしてみようという幸せな衝動を感じるようになるのです。

みなさんが、そんな魅力的な人と出遭い、みなさん自身が本当にしたいと思えるものを見つけて、それに心から打ち込む。それを続けていけば、いつの日か、自分にしかない魅力が出てきます。そうなったみなさんの話を聞いて、自分も何かをしてみようという次の人が現れてくるかもしれません。

本当に好きなこと、持って生まれた自分の才能を一番に発揮できるものを見出して、それを仕事や生きがいとして生活できる。それはとても幸せなことです。ただ、どれだけの人がそれをできるでしょう。いろいろな事情で、好きなこと、本当にしたいことができずに人生を送る場合が多いかもしれません。でも、もし、そうできるチャンスがあるなら、自分の可能性を試すに足りる、心からやってみたいと思うことを探して、チャレンジしてみる価値はあると思います。

自分探しを奨励するような、たわいもない話である。しかし、学生たちに話しながら、この話のようにあって欲しいといつも心で願っている。正直なところ、魅力が出るか出ないかは、わからない。それは他人が感じることだろう。しかし、自分の好きなことをして生きていけるのは、やはり幸せなことである。そして、わたしはその幸運な人間のひとりだと思う。先進的研究

を展開する刺激的な同僚たち、意識の高い素晴らしい学生たち。彼らがいる大学で、好きな研究をして、好きなことも教えられて、人並みの生活はできている。ありがたいことである。ただ、こうした生き方ができているのは、人とのめぐり合わせに恵まれた故のことのように思われる。これまで、どれほど多くの人に支えられ、どれほどお世話になってきたことか。そのなかには、わたしが人生の節目節目で出遭うことのできた「魅力的な人」たちがいた。穴があったら入りたい。後からそう思う失敗を何度もしては後悔してきたわたしの前に、あの魅力的な人々が姿を現し、後悔する自分自身を笑い飛ばし、次に歩みを進めることを、その人たちは自らの姿と言葉で示してくれた。こうした方々がいたからこそ、わたしは自分に合った、本気で打ち込めるものを見つけ、それを仕事として日々過ごすことができている。この方々とのめぐり合わせの幸運を今更ながらありがたく思う。

（拙著の「あとがき」より）

定年退職を迎えるまで、お世話になった英語専攻の先生方、箕面事務室のみなさんに心から御礼申し上げます。そして、大阪外大当時からの多くの英語専攻の卒業生、学部生、院生のみなさん、わたしの後任となる岡本君、本号にエッセイを寄稿してくれた森瑞樹君（広島経済大学・准教授）をはじめ研究者として活躍してくれている教え子のみなさんに、感謝の思いを伝えたいと思います。みなさんとの出会いがわたしの人生を豊かで、意味深く、暖かいものにしてくれました。この大学、この専攻で、教鞭を取り、研究をし、公務に、学会活動に携わってこられましたこと、すべてが愛おしく、なつかしく、心に刻まれた大切な、幸せな記憶です。そして、それらすべてが、退職後の新たな人生に向かうわたしの糧となっていくと思います。

みなさん、今日まで本当にありがとうございました。

箕面新キャンパスでの英語専攻のますますの発展を心からお祈りいたします。

そして、またお会いできる日が来ることを楽しみに。
お元気で。